

## 朝鮮および日本仏教に及ぼした宗密の影響

鎌田茂雄

ただ今御紹介いただきました鎌田であります。私も駒沢大学の学生の頃に弁論部をやっておりまして、この壇上で随分しゃべっております。その頃は、陸軍士官学校から復員して来た時で、大変元気よくて、号令・命令で鍛え上げた声でやっただけですから、この大講堂が大変狭く感じられたのであります。今こうして二十五年経って上がりますと、——昭和二十六年に本学を卒業させていただいたのであります。随分広く感じられました。そして、音声も衰え、頭の毛もなく、そして、そろ／＼だめになったのではないかと感じます。今日は、後で真打の高崎先生の如来蔵思想のお話がありますので、私は、大ざっぱな話を致しまして、場を渡がせていただきたいと思います。

宗密の朝鮮仏教及び日本仏教に及ぼした影響という題であります。実は、この数年来、韓国仏教の調査——仏教儀礼の調査——をやっております。同じ漢訳仏典を依り処としております。中国仏教圏というのがあります。これは隋唐帝国が、冊封体制を敷いた時、周辺に中国仏教が伝播して行ったわけで

ありますが、その東アジア世界像というものを考える場合に、三つの柱があります。まず第一は、律令体制、第二は漢字文化圏、第三は、この仏教であります。同じ漢訳大藏經に依拠しながら、同じ中国仏教が伝播したのであります。それぞれ、かなり違う特質を持っておりまして、中国と日本、そこへ朝鮮半島の仏教を介在させまして、比較思想的な立場から、それらを検討している仕事を、この数年続けているのであります。宗密を考える場合にも、従来は、これを禅宗の立場は禅宗史の資料だけを取上げてやっただけであります。それから『原人論』という本があります。私も駒沢大学の予科で習いまして、今も仏教学部でやっております。これは儒教・道教・仏教、それぞれの綱要書と申しますか、それを読んで宗密の名前を覚えたのであります。宗密というのはいけないんだ、本当は宗密と呼ぶべきだ、という人もおりますが、まあ、それは中国語で読めばいいのであって、どちらでもかまわないと思っております。とにかく、そういうような宗密像を私達はつかんで来たのであります。禅宗史をや

る人が盛んに引用するのは、禅宗の資料に関するところだけでありまして、その外はすべて捨ててしまおうというのが現状であります。私は、何とかして、その全体像をとらえようと致しまして、まず『原人論』から手をつけまして、『原人論』をやったわけですが、依然として分らないのは、撰述年代であります。これが若い時のものか、年とって書いたものか分かりません。『禅源諸詮集都序』と比べますと、儒道二教および仏教はありますが、禅宗のところがないのであります。それから『禅源諸詮集都序』の方は、儒道二教がなく、『原人論』には禅宗の部分がありません。それで『円覚経大疏鈔』を堪念に当りまして、対照出来る部分をかなり抜き出して見たのであります。依然として確定は出来ません。ただ、これは韓愈が『原人』というものを書きまして、人間の本性というものをも儒教の世界観から究明したのであります。それに對しまして、宗密が人間の本性を仏教の立場から論究するとうなるか、というのをやったのが『原人論』であります。あの種の仏教的人間論と言ってもいいわけでありまして、その仕事は『原人論』として結実したのであります。

私達中国思想史の立場からながめますと、これは馮友蘭という学者が言っているのであります。『原人論』の思想史的意義は二つあるそうです。それは、程伊川・程明道・朱子に到る宋学の、心と氣とを対立させる思考の原型があるというこ

とが第一点。第二点は、心の所変として元氣を考えるのであります。氣を考えるわけであります。そうして宇宙がすなわち心であるという陸王学の、やはり原型がある。だから『原人論』の考え方というものが、後の宋学・陽明学との関連において、中国思想史上、重要であるということが言われております。あるいは、武内義雄博士の指摘であります。『原人論』の一部が、周茂叔の『太極図説』に引用されている、というようなことから、もう一度照明を当てる必要があらうと考えているのであります。私には荷が重すぎまして、手が出ないのであります。将来は中国思想史の上に、それを乗せてみるという仕事の一つあらうかと思えます。また中国の仏教思想史からながめて、吉蔵の『三論玄義』に現われた外道批判、道教・儒教批判に對しまして、宗密の『原人論』とはどう違うか、ということも問題になるのであります。儒教や道教よりも仏教がすぐれているんだ、というだけをやると、確かにすぐれているけれども、それがまた仏教の中へ取入れられるのであるというのは異なる。『起信論』の真如と、真如の随縁という論理を使いまして、それぞれの儒教、道教、それから仏教の中の小乗教、法相教、破相教、そういうものの位置づけをやったのが、『原人論』の大きな意義であらうと思えます。

第二に『禅源諸詮集都序』、略して『都序』と申し上げますが、これは、教禅一致説の形成と昔から言われておりまし

て、法相宗に対して禅の北宗を、三論宗に対して禅の牛頭禅を、華嚴宗に対して禅の洪州宗と荷沢宗を当はめたのでありますが、従来は、教の三教と禅の三宗を当はめたにすぎない、と言われていたのでありますが、私は、これを思想史の問題として考えまして、法相宗と北宗、三論宗と牛頭宗、華嚴宗と洪州宗乃至は荷沢宗という思想史の、教学仏教が実践仏教に変わるとどういふ形態をもつのか、ということを考えてみたのであります。ここに天台宗が欠けて参りますので、天台宗をどう考えるか、ということが、今後に残された問題であります。

次に、宗密の思想の特徴の第三点でありますが、『禅門師資承襲図』という本があります。これは中国には残っておりません。韓国にもありません。日本の日蓮宗の京都の妙顕寺というお寺で、明治四十三年に発見されております。それが大日本統藏経の中に収録されているのであります。これは、慧能が死んだあと、百二・三十年間の中国の禅宗史であります。宗密の眼でとらえた中国禅宗史であります。これあるがために、八世紀から九世紀の初頭にかけての禅宗の様々のことが知られて来るわけであります。ただし、宗密の眼を通して見た禅宗史であるということをしつかりと押えまないと、それを客観的な事実であるということできやりますと、問題が生ずることがありますので、注意する必要があります。とに

かく、八世紀から九世紀にかけての中国禅宗史がそこに描かれていたのだ、ということでもあります。この本の特徴は、『都序』では荷沢宗と洪州宗は区別がなかった。しかし、この『承襲図』においては、洪州宗の上に荷沢宗を乗せたのであります。胡適の研究によりますと、宗密は、荷沢宗を継いだのではない。自分は、荷沢宗を継いだのではなくて、浄衆寺神会の系統を承けながら荷沢宗の隆盛を自分のものとするために、荷沢神会の法系を承けた、と言ったのであろうという説もありますが、中々断定は出来ません。浄衆寺神会の系統を承けながら、荷沢宗を自ら相承した、と声を大にして言ったのではないか、という疑念が、そこに持たれるのであります。

第四番目には、『円覚経』の註釈であります。この『円覚経』というのは、中国で撰述された偽撰の経であることは、望月信亨博士などによって立証されておりますけれども、宗密は円覚経の『略疏』を書き、それから『大疏』を書き、それを註釈して『大疏鈔』を著わし、さらにそれを略鈔して『略疏鈔』を著わしているのであります。宗密の一生は『円覚経』に打込んだ人生であると言えらると思えます。彼は最初は儒家であったのでありますが、後に出家し、そして若い情熱を持った時に、『円覚経』との出会いを経験したのであります。

す。大変な感激をもって『円覚経』と取組んだ。一人の人が、一つの經典に対して、現在、大日本統藏経の量で、大変な分量の註釈を加えたということは、異常なエネルギーであると思います。著述の前後を追って来ますと、二・三年に一つの位で、大きな著述が次々に完成されて行くのでありますが、正に学問をすることが、行であったと思われるような著述の量であります。

第五点と致しまして、仏教儀礼―中国の仏教儀礼―の展開過程における宗密の位置づけであります。それは、『円覚経道場修証儀』という本を書いていることでもあります。この本は、大変に歴大な儀礼の本であります。中国の儀礼は、もと／＼道安によって確立されたと言われております。東晋の道安でありますので、かなり時代が古いのでありますが、その時代に確立された。その道安によって確立された仏教儀礼が、天台大師においては、それが色々な懺法として展開されております。あるいは梁の武帝においては、それが水陸会の懺法であるとか、外の色々な懺法の型が南北朝時代に確立されている。そういう伝統を踏えながら、宗密が、仏教儀礼の集大成を目指し、その成果が現存しているのであります。大日本統藏経の「礼懺部」にそれがあります。この礼懺部というのは、全く未開拓の領域でありまして、誰も読まない本であります。これは、中国の仏教儀礼をやるには、どうしてもこれ

を研究しなければならぬ。そして現状の把握と歴史的な展開とを合せましてやらないといけない。アメリカやフランスの学者は、こういうことを非常によくやるのですが、日本の印度学仏教学会というのは、教理学至上主義でありますために、こういうものを発表しますと無視される。そういうわけで、研究者が少ないのではないか。むしろ、宗教学の学者であるとか、たとえば、タイの仏教儀礼の研究では、大阪大学の青木保さんであるとか、そういう社会人類学の学者等がやっておられるのであります。この大きな宗密の仏教儀礼は、実際に中々行なわれない。それを非常に短縮したのが、浄源の『円覚経道場略本修証儀』であります。これは、それを簡略したものでありまして、歴大なものを簡単に行なえるようにしたものであります。これが、中国の仏教儀礼の伝統―現代の中国の仏教儀礼の伝統―をつくる端著になるわけです。当時、一行慧覚は、『華嚴海印道場懺儀』という四十二巻の歴大なものを残しております。とにかく大日本統藏経の礼懺部を解読すること、そして、その歴史的展開のあとづけをすること、これが儀礼史におきまして、今後残された問題であろうと思うのであります。宗密の仏教儀礼は、永明延寿に継承されます。永明延寿に継承されました仏教儀礼は、朝鮮半島に伝わります。例えば、現在半島に残されていますところの、百八懺悔というような悔過の方法は、永明延

寿より伝わりまして、現在でも行なわれているのであります。私の作業仮説であります。中国の仏教儀礼の歴史的展開のあとを、空間的に把握するしか手がないと、今考えているのであります。例えば、唐の中頃の儀礼は、日本の比叡山あるいは高野山あたりで何とかつかまなければならぬ。それから唐末五代の儀礼は、現在の韓国仏教の儀礼に流れているのではないか。それから南宋の儀礼は、曹洞宗なり臨済宗の五山、禅宗五山に継承されているのではないか。それから原因は、はっきりつかめないのであります。明の雲棲株宏によりまして儀礼がはっきり固まります。そして現代の中国、香港、台湾あるいはシンガポール、マレーシアあたりで行なわれている儀礼は、明の時代に確立されました儀礼が伝播しているのであります。どうしても、明以後の儀礼は、現場で、香港あたりで研究をやるしか手がない。歴史的な研究をする場合に、空間的な調査でうずめるしか、はっきりとその実状をつかめないというのが、現状であります。その一つの頂点と言いますか、始源と申しますか、そういう意味で、宗密の『道場修証儀』というのは注目する必要があるかと考えるのであります。

以上、五点にわたりました。宗密の問題を整理したのであります。それが朝鮮半島乃至は日本にどう影響を与えているか、というのが次の問題であります。まず朝鮮の華嚴、

新羅の華嚴を考えてみます。新羅の華嚴と言うのは、華嚴宗第二祖智儼の弟子に当る義湘にまず伝承されます。ところが、義湘は華嚴の大成者である法蔵と兄弟弟子であります。そのために法蔵と義湘というのは、古い華嚴に属するわけで、新羅華嚴というのは、華嚴の原型であります。それは智儼の華嚴が伝承されて行ったのであり、そこには、澄観・宗密の影響というものは全くありません。これは純粹に華嚴宗の古い原始華嚴の教学が伝播してあります。その次に、同じ新羅の表員という人がおります。表員という人は、『華嚴文義要決問答』四巻を書いております。これが大変な本でありまして、各重要な華嚴学のテクニカルタムを集めまして、その歴史的な展開をあとづけております。例えば「法界」ということであります。經典の典拠、それから中国仏教における典拠、たとえば浄影寺慧遠であるとか、そういう諸説を順番に上げておりました。大変整備された論文集であります。この表員のものは、奈良時代の末期、あるいは平安時代の初めとも言われるのであります。表員が、『五教章指事』に引用されております。寿靈に引用されていますので、表員は、それより以前であると言えるのであります。寿靈の教学には、澄観、宗密の影響はなく、浄影寺慧遠の影響があるのであります。勿論、この表員にも宗密の影響はありません。次に新羅の明島、この人に『海印三昧論』というのがあります。こ

の中にも宗密の影響というのはありません。それから見登という人がおります。この人に『華嚴一乘成仏妙義』というのがあります。これを見ましても、慧苑の影響はありますが、澄観、宗密の影響はありません。そう考えますと、宗密の影響を華嚴教学の中で捉えますと、どうしても均如に至らざるを得ない。この均如というのは、大変な人でありまして、朝鮮の華嚴宗の南宗と北宗の教学を総合した人であります。多くの著書を残しておりますが、現存しているのは、『五教章円通鈔』あるいは『華嚴旨帰円通鈔』あるいは『十句章円通鈔』、こういうものが、大きな本で戦前に出版されておりますが、研究は絶無であります。全く読まれていないというのが現状であります。これを検討する必要があります。でもあるのだ、ということでもあります。これも今後に残された課題でありまして、均如の教学をどう捉えるか、それを中国の華嚴教学との関連においてどう見るか。もう一つは、『五教章』だけを主題にすれば、宋代に華嚴教学が復興されます。そして、様々な仏教者の註釈書が著わされます。それと朝鮮の高麗初期の註釈書とを比べて見るわけです。どこがどう違うのか、というのが、今後に残された問題点であります。もう一つ、義湘という人に『華嚴一乘法界図』というのがあります。これは日本の明恵上人に大きな影響を与えているのであります。が、これを註釈した『法界図記叢髓録』というのがあります。

朝鮮および日本仏教に及ぼした宗密の影響(鎌田)

これは、大正蔵の四十五巻にありますが、これは非常にめずらしいもので、新羅の華嚴学者、たとえば法融、真秀、崇業、林徳というような学者の学説を縦横に引用するのであります。めずらしいのは、神秀の『妙理円成観』を引用しております。これは、禅宗の北宗禅の神秀であります。この本の撰述時代は、高麗末か、あるいは李朝に入るのか、私もあまりよく知りませんが、これは、均如の著作をかなり多く引用しているということ、これももう一度検討する必要があります。と考えるのであります。新羅華嚴というのは、均如のもの以外は、資料が断片しかありません。ですから、こういうものから、原型を復元することが、どれだけ出来るか、今後の課題であります。

次に『禅門宝蔵録』というのがあります。これがやはり高麗時代であります。これは、天頌という人のものであります。これを見ますと、宗密の「禅源諸詮集序及本録」と題する引用があります。これを、かつて黒田亮博士が検討を加え、この引用文の前半は『都序』からの引用、後半は「本録」すなわち『禅源諸詮集』からの引用である、とされた。だから、『禅源諸詮集』百巻というのは、かつて現存したのである、ということと言われたことがあります。実は、後半は『円覚経略疏鈔』とびったり合うところがあるのであります。だからと言って、「本録」の中にも、それがあった場合もある

るわけで、『禅源諸詮集』というものは、存在したのではないか、ということが、これで言われるのでありますが、確定はできません。『禅源諸詮集都序』に対する朝鮮半島の註釈は、ざっと見ても、六種あります。いかに『都序』が重視されたか、ということが分るのであります。ところが、中国仏教の方では、註釈は一つもありません。しかるに、朝鮮半島では六種あり、その中の二種は、『都序着柄』というものと、『都序』の『科目并私記』というものが現存しております。昔の京城帝国大学において、前の永平寺貫首であられた佐藤泰舜禅師が、墨で助手に筆写させた本が、本学の図書館にあります。誠に貴重な本でありまして、私もそれを拝見させて戴いたのでありますが、とにかく、そういうものがあります。

次に、もう一つ重要なものが、知訥のことです。現在、彼は韓国曹溪宗の開祖(?)とされているのでありますが全羅南道の松広寺に定慧社を設けた人です。そこに修禅社があります。現在でも、韓国の僧侶、アメリカ人をはじめとし世界中の人が集って、その山奥で坐禅を組んでおります。この寺を建てた知訥という人の名が、普通の仏教辞典に載っておりません。これほど有名な人が、どうして載らなかったのか、と思いますが、知訥の著作に『法集別行録節要并私記』と題する書物があります。それ以外に、二年前に

『金沢文庫資料叢書第二』として出しました華嚴篇の中に収めた、李通玄の『華嚴論』を節要しました『華嚴論節要』も知訥が書いたものであります。これは韓国にもありません。どこにもない。金沢文庫にだけあったものであります、かつて金知見博士が出版しましたが、二年前に、若い学者が協力して句読訓点を施しまして、金沢文庫から出したのであります。この『法集別行録并私記』について、従来の解釈では、たとえば宇井博士は、『禅門師資承襲図』の節要であり、それに対する註釈である、というように考えたのであります。現在、東国大学の李鐘益博士の著書『高麗普照国師の研究—思想体系と普照禅の特質—』を見ますと、これは、『法集別行録』という書が宗密にあって、その節要並びに入私記である。だから、朝鮮半島の伝承では、『法集別行録』というものがあつたのだ、ということになっております。これは、法というのは、禅宗の四つの宗で、その四つの宗を集めて、別々に別行したから『法集別行録』と題するのである、ということになっておりますが、それがまた問題でありまして、一体、『禅門師資承襲図』とどういう関係になるのか、ということが、今後の残された研究課題の一つであります。これにつきましても、李朝に入りますと、定慧(一六八五—一七四一)という人が『別行録私記画足』という註釈を書いております。以上、朝鮮半島に及ぼした宗密の影響というものを、

ほとんどは分らないのでありますが、簡単にお話し申し上げまして、次に日本に入りたいと思います。

日本の仏教史で、宗密の影響が顕著に出てまいりますのは、ずっと時代が下りまして、鎌倉時代の明恵であります。凝然にも、勿論宗密の影響はありますが、こちらの方に、より顕著に現われてくるのであります。これは、凝然の教学と明恵の教学とを比較すると、歴然たるものがあるので、一目瞭然というわけです。明恵は、高山寺に住していた時に、弟子が初めは五人位いたらしいのですが、宗密の『円覚経』の疏を講義をしたところ、だんだん弟子がいなくなってしまう。最後は一人になった。その一人を相手に、ずっとやったということが、伝えられております。ですから、『円覚経』の註釈、宗密の『略疏』『大疏』などに対する異常な情熱を傾けたのではないかと、と思われるのであります。その明恵の弟子に、証定という人がおります。伝記がつかめないものでありますが、この人は、はじめ明恵の弟子で坊さんであった。理由は分りませんが、後に居士になります。ですから『禅宗綱目』という本を書いた時には、すでに居士であった。だから、この本を見ますと、証定居士とあります。この『禅宗綱目』につきましては、かつて、この本が発見された時に、書誌学的な研究を、大屋徳城博士がやっておられます。京都大学、高山寺に夫々一冊と、鎌倉の松ヶ岡文庫に一冊あります。大蔵経等どこにもないの

であります。岩波の日本思想大系の中の『鎌倉旧仏教』に収録をしておきましたので、見ることは可能になったのであります。これを見て、驚ろくべきことには、宗密の『禅門師資承襲図』及び『都序』『円覚経』の鈔、註釈書、それから全面的引用から成っている本であります。そして華嚴宗の頓悟・頓教と、禅宗の頓悟の相違点、同じ点を詳細に論じたものであります。すべては、宗密の書からの引用で固めていると言ってもいいのであります。この証定の『禅宗綱目』は、しかし、あまり読まれることなく埋没してしまったのではなしか。ただ証定は、あれだけ『都序』を引用しながら、教禅一致説を捨て去ったわけでありませう。教禅一致説というのは、誰にもうけいれられない。教か禅かどちらかに片寄ってしまうのであります。証定がそれを捨て去ってしまう。そして、禅の方向を、より強く打ち出して行くのであります。『禅宗綱目』と名前を付けているのでありますので、禅にウェイトがかかること、これまた当然とも言えるのであります。もう一人は、東大寺系統であります。明恵の影響を強く受けた、朗遊という学者がおります。この人は、『華嚴香水源記』という本を著わしております。その中に、五教を論じた五教義というのがあります。これを、東大寺系統華嚴学を標榜する凝然の『華嚴五教建立次第』というのと対比致しますと、特に頓教の解釈が、全く違うということが分ります。



凝然は、頓教を理解するのに、どこまでも法蔵の考え方、それを忠実に承け継いで理解するのであります。あるいは、『楞伽経』と『起信論』、このあと高崎先生からお話がありますところの如来蔵思想というものを背景に致しまして、そうして論じて行くのでありますが、この朗遊は、頓教を論じるのに、宗密に依るのであります。荷沢の靈智本覚を根本に置きまして、大乘頓教を論じております。同じ時代でありながら、かくも違った思想史的な伝統を承けて、このように違った解釈をするのか、と思うほど違って来るのであります。

そして、宗密の『禅源諸詮集都序』に説かれました禅の三宗と教の三教を引用致しまして、頓教の解釈をしいるのであります。こう考えますと、宗密というものが、やはり高山寺系統に、より大きな影響を与えて行ったのではないか、と言えらると思えます。このように、宗密が日本仏教に及ぼした影響というものは、実は、あまりありません。この高山寺系統に多くの影響を与えた位で、その外には見るべきものがありません。少し前に、東京大学の大学院学生の修士論文を読んだ時に、修験道の中の文献に、かなり宗密のものを引用しているのを見つけたことがあります。要するに、宗密が一番大きな影響を与えたのは、日本ではなくて、実は朝鮮半島なのだ。現在、韓国仏教におきまして、宗密の『都序』は、必須の、どうしても読まなければならぬ本に指定されているとい

うことであります。でありますので、朝鮮仏教を考える場合には、特に高麗以後の朝鮮仏教を考える場合には、宗密の影響を度外視しては考えられないだろうと思うのであります。

一方、問題を中国の本拠に戻しまして、宗密の影響というものをお考えすると、例えば、明の李卓吾という人がおります。これは近代思想史では、ジャンジャック・ルソーに匹敵される人であり、陽明学の左派から出た人でありますが、この人が、『華嚴論簡要』という本を書いている。李通玄の華嚴の影響でものを考えるのであります。先程述べました、知訥の『華嚴論節要』と李卓吾のやった『華嚴論簡要』を比較することによりまして、朝鮮半島の人はどういふところにより強い関心を、そして中国の明の思想家である李卓吾は、どういふところに強い関心を持ったのか、ということが分るわけがあります。中国の本来の華嚴教学史の展開を考える場合にも、やはり朝鮮半島、そして明恵を対極に置きまして、やる必要があろうと思うのであります。

大変、話が雑でありまして、一つ展望をと思ひまして、こういういいかげんなお話を申し上げたのであります。残された問題があまりにも多いのであります。特に朝鮮華嚴というものは、ほとんどやられていない。朝鮮華嚴がやられていないために、日本の奈良の華嚴というものが、少しもつかめないのであります。どうしても、日本の初期の華嚴教学史を

つかむためには、朝鮮華嚴と比べる必要があるかと思うのであります。先程申し上げました均如の『円通鈔』を見ますと、『華嚴五教章』の宋本と和本に関することを言っております。私達は、伝統といたしまして和本を使います。今までの解釈では、和本というのが本当のものなのだ。宋本というのは、宋代に一度手を加えたものなのだ。どう違うかと言うと、上中下巻で『五教章』が成り立っているのでありますが、簡単に申しますと、和本が上中下巻の順序から成りたっていますが、宋本は、上下中巻となり下巻と中巻が逆になっています。大正大蔵経は、宋本に依っているのでありますが、日本の華嚴学は、凝然以後、全部和本に依っているのであります。『冠注五教章』も和本に依っております。その中で、義湘が手を加えたという鍊本というものの存在を考えまして、和本と朝鮮本がどう違うのか、あるいは同じなのか、そして東大寺で一番最初に華嚴経を講じたのが審祥であります。この審祥大徳は、新羅の人であります。これが、中国の長安に渡りまして、法蔵のもとで勉強をしまして、新羅に帰り、そして日本に来て、東大寺において講義を始めたのであります。どうしても、そのあたりに、ねらいをつけますと、新羅華嚴、日本の古代華嚴、奈良・平安の華嚴、そして中国の華嚴と、これを比較研究しながらその真相をつかんで行かなくてはならないのではないか、と思うのであります。これは、

朝鮮および日本仏教に及ぼした宗密の影響(鎌田)

言うことは大変簡単であります。実際の仕事として、これをやろうとなると大変なことであります。どこまで出来るか、どこまで奈良の華嚴学というものが分るか。あるいは、寿霊の研究に、横からの照明が当てられるか、ということが、今後の課題であります。私は、中国の仏教思想史を専門にしてるのであって、日本や朝鮮半島は全く分らないのであります。ただ、日本を考える場合には、どうしても、大陸との関連から、ものを考える必要があると思います。これは、法相宗であっても、華嚴宗であっても、三論宗であっても、すべて大陸との関連という大きな一つの輪の中で、ものを考えなければならぬ、と痛感するのであります。大陸の仏教、そして朝鮮半島の仏教、そして大きなウェイトを持つ、我が日本の仏教というものを、特に中国仏教の延長線上にあると思われる奈良を考える場合には、それが必要であるということとを痛感致します。でありますので、今後の研究の態度としては、縦にやるのが一つ。中国仏教を中国思想史の上に乗せてやるのが一つであります。それから、巨視的な把握の仕方としまして、インド仏教、チベット仏教、日本仏教、朝鮮仏教との横の関連からもものを考えると、この縦と横との交錯において、学問的な追求をする必要があるかと思うのであります。(本稿は去る五月二十一日、仏教学会の講演筆録に、筆者が加筆整稿したものです。編集係)